

山と博物館

第36巻 第3号 1991年3月25日

大町山岳博物館



フレームをするシャモアのオス

シャモアのその後

平成二年三月に大町山岳博物館へオス一頭、メス二頭のシャモア(アルプスカモシカ)がやってきました。このシャモアは大町市とインスブルック市、山岳博物館とアルプス動物園との友好提携五周年を記念してアルプス動物園から贈呈されたものです。到着の日から公開され、「アルプスの貴公子」の名にふさわしい軽快な動きを見せてくれました。

山岳博物館の飼育場やエサには三月中旬になってようやく馴染み、四月上旬には人の近くまで寄ってくるようになってきました。

五月二十八日の朝、一頭のメスが座り込み、人が近づいても逃げる気配がありません。獣医の診療を受け治療にあたりました。夜を徹しての介護のかわりに、翌二十九日の早朝落命しました。死因はストレスによるもので、日中と夜の気温差にシャモアの生理が追いつかなかったものと考えられます。

六月二十八日、残るメスが死亡しました。腹部に強い力が加わったことが死因でした。前日まで降り続いた雨でぬかるんだ斜面から平なコンクリート面に来て滑りバランスを失って転倒したのかもしれない。今はこの斜面に石積みをし、コンクリートも滑りにくくしました。

友好の証としてシャモアに子供をという願いを無にしないため、国内ではシャモア飼育の先駆者である三重県の日本カモシカセンターへ相談したところ、「グレーテル」という名のメスのシャモアの譲渡をご快諾いただき、平成二年十一月九日に大町へ移送しました。

しばらく網ごしにお見合をさせた後、十二月と一月の二ヶ月間一緒にしました。春に元気な赤ちゃんを出産するためには少し遅すぎたベアリングでしたが、二頭は仲よく過ごしていました。

一年前のオスはまだあどけなさを残る顔立ちと、どこことなくしゃやかな体つきでしたが、最近はやや背中のタテガミに風格が出て、メスがやってきてからはフレームという笑い顔のような上唇を巻きあげる行動をするようになりました。

一人前になったオスと姉さん女房のグレーテルは今日も元気に雪の解けはじめた飼育場内を散策しています。(大町山岳博物館)



山博友の会の一年

友の会事務局

山博友の会は山岳博物館と密接に連携した相補的外郭組織である。

平成三年三月五日現在の会員数は、一名で入会する個人会員が五九名、同居の家族で入会するファミリー会員が九七家族三四五名の計四〇四名と、賛助会員一団体で、全体の六割を市内、残りの二割ずつを県内・県外在住者が占める。

活動は会員からの年会費(個人三五〇〇円、ファミリー一家族四〇〇〇円等)や参加費などを主な財源に独立会計でまかなわれている。

会員の特典としては、①山博への無料入館 ②本紙『山と博物館』の配布 ③年会報『ゆきつばき』と、各行事等を不定期に通知する「ゆきつばき通信」の配布 ④山博の施設・資料の条件付利用 ⑤友の会主催行事への無料または実費参加などがあげられる。

ここでは、本紙第三四巻第一二号に掲載できなかった平成元年度の残行事と、二年度の行事の概要を記し、友の会活動の報告としたい。

くんせい作り教室 平成二年一月二十一日

(参加者) 会員十五名 一般十名
(講師) 草薨 勲

友の会初の試みとして山博を会場に行われた。教室でまず燻製の種類と方法について説明をうけてから中庭で温燻法の実習に移った。特製のドラムカン燻煙器を囲み、煙と温度の



くんせい作り教室

調節を教わり、各自が持ち寄った甘塩の魚介類に煙をかけてみた。昼には講師特製の鶏・馬肉・サンマなどの燻製を試食した。冷燻法をはじめ本格的な燻製を勉強するには相当の時間と手間がかかる。今回の教室はごく初歩の燻製体験の場となった。

総会 四月八日

(参加者) 会員のみ二十五名

終了後、会員の宮島トキさんにはスイスアルプス・トレッキングの、武田武さんにはヒマラヤ・ランタン谷トレッキングのスライドを紹介いただき、一部希望者は許可を得て木崎湖に流れ入る稲尾沢へ、産卵に溯上するワカサギをすくうに行行った。残念ながら収穫は無かった。

小鳥の声を聞く会 五月五・六日

(参加者) 会員二十五名 一般三十四名
(講師) 佐野昌男(鳥)

清沢由之(自然全般)
草薨順子(宮沢賢治の作品)
丸山卓哉(星)

県山岳総合センターに宿泊しての恒例行事。一日目は夕食後に学習会。野鳥と春の北アルプス山麓の自然に関するスライド上映とお話、宮沢賢治童話や星にまつわるお話を聞いた。二日目は早朝五時前に山博を出発。好天に恵まれ、鷹狩山中腹の折り返し点までに三十四種の小鳥を確認、一部参加者は珍しいオオルリも目撃することができた。朝食時には山菜の学習もした。

春の写生大会 五月六日

山博・市教委・中日新聞社と共催
(参加者) 主に市内児童生徒 一四二名

山岳博物館とその周辺で風景・動物・草花など自由な題材に筆を走らせた。作品のうち三十二点を選び、第35回中部地方動物園水族館写生コンクール中央審査に提出。昨年に続き文部大臣奨励賞をはじめ各賞を受賞した。全作品は六月十七日・二十四日の間、山博の『動物写生画展』で公開された。

小熊山トレッキング 六月十七日

(参加者) 会員のみ十七名
(講師) 宮田 渡(生物全般)

木崎湖の西側に長く尾根を伸ばす小熊山中腹を縫う林道の一部を、晴天の鹿島槍・爺ヶ岳を眺め、植物の勉強をしながら歩いた。また黒沢高原(鹿島槍スキー場)では湿原の植物を観察し、自由時間を過ごした。



小熊山トレッキング 黒沢高原にて

美術館めぐり 七月二十二日

(参加者) 会員のみ二十四名
(講師) 石沢 清

当日から山博でオープンした特別絵画展、『国立公園50景展』を鑑賞後、山梨県長坂町の清春白樺美術館と、茅野市蓼科高原のマリー・ローランサン美術館を見学した。

立山登山 九月一・二日

(参加者) 会員のみ二十名
(リーダー) 長沢正彦

武田 武(応援)

一日目、室堂の立山自然保護センター見学、雷鳥平、剣御前小屋、別山、内蔵助山荘泊。二日目、立山一ノ越、東一ノ越、タンボ平、黒部湖遊歩道、黒部ダム。登山に先だつ自然保護センターでのライチヨウを中心とする予備学習は意味があった。二日目の行程はやや長かったが、あまり人気



雨のキノコ学習会



立山登山 東一ノ越にて

のない東一ノ越、黒部湖間の道は適度に荒れており野趣も味わうことができた。



黒部溪谷探勝会

黒部溪谷探勝会 十月二十一・二十二日
(参加者) 会員のみ二十名
(役員) 荒沢 進 高橋さき子
関西電力のご好意で、黒部ダム、黒四発電所、所々樺平宇奈月のコースをたどり、黒部の電源開発現場と溪谷の自然を見学した。発電所途中の関電トンネル横坑からは、幸運にも飯岳を仰ぐことができた。また、高山平野に出たからは、職員の皆さんのご好意で、開館時間外や休館日にもかかわらず黒部市吉田科学館と富山市科学文化センターを見学することができた。

キノコ学習会 九月三十日
(参加者) 会員十四名 一般七名
(講師) 長沢正彦 太田 勇
山博で開催中の『秋の草花とキノコ展』で予備学習してから、ドシャ降りの真山へ出かけて採集と実地勉強をした。キノコ狩りは初めてという都会からの参加者も多く、雨にぬれながらも熱心にキノコを探していた。下山後はキノコ汁で体を温め、採集したキノコの鑑定会を行った。

以上、簡単ではあるが、友の会の行事を記録させていただきます。
これらの行事に代表される友の会の活動が、役員の方々の皆さん、講師の先生方をはじめ多くの方々の変わらぬご協力と、博物館とのさらなる連携によって、より良い方向に発展し続けることを願っている。

秋の梅池自然園と天狗原を訪ねる会 十月二十一日
(参加者) 会員二十名 一般八名
(講師) 宮田 渡(自然全般)
小谷村の梅池自然園入口で予備学習をしてから、植物を観察しながら天狗原までの遊歩道を歩いた。好天に恵まれ、天狗原では自由行動の時間もとれた。紅葉を見るには時季的に遅く残念だった。
木崎湖の魚に親しむ会
十一月十一日に開催、ワカサギのボート釣りを予定だったが、荒天が予想され中止。
歩くスキーマの会 二月三日
(参加者) 会員十八名 一般十一名
(講師) 渡辺逸雄 西田 均
昨年は大雨で中止したものの、恒例行事として毎年大町スキー場周辺で開催してきた。今回は初の試みとしてヤナバススキー場のリフトを乗り継いで権現山の頂上付近に達し、約六キロの林道を美麻村新行まで下った。
初心者には少し大変だったが、穏やかな日和と鹿島槍ヶ岳の眺望、そして冬の山野の美しさに触れ、少なからず歩くスキーマのファンも増えたと思われる。



林道を歩く



天狗原にて

友の会では常時、会員を募集しています。入会方法その他お気軽に博物館内、友の会事務局にご照会ください。

チヤンタン紀行(4)

西田均

車は隊列を組み南へひた走る。時折右に左に列を離れ遙か彼方の黒い点「ゾン(野生ヤク)」の死骸をめぐりて走り去る。家の玄関口に魔よけとして飾るのだからラサへ持ち帰れば高く売れるだとか、諸説紛々であったが、「ラサで展示し野生動物保護への関心を高めたい」というのが最終結論となった。

ソーダ質の湖が点在していることは前に述べたが、塩が結晶した湖では、普通の家ならば四年や五年は充分に使えるほどの塩を幾袋も車に積み込む。寺院に寄進するのだと言う。奥地の塩は宗教的な価値もあるらしい。たぶん自家用も含まれているのだと思うが。

早く帰らなければ危ないと言いながら、何かを見つめる度に繰り返される高原の拾い物は、チベット人にはさながら宝拾いといったところのようだ。

ベースキャンプを出発して二日目の夕方、最初の町ルマに到着した。今までのキャンプは道端、遊牧民のテント脇などばかりだったが、街でのキャンプには街中の人が見物にやってくる。最初は物珍しげに覗いていたのが、次第に大胆になり無言のままテントの中へ入り込んで来る。

「出て行け」というチベット語は誰も知らず、ジエスチャーも通じないのか、知らぬふりをされたのか。じっと我慢するのみ……。彼らには初めて見る日本人、いや外国人なのだ。この珍しい生物の一挙一動を観察してい

るといったところか。

以後、街でキャンプする度に同じことが繰り返された。動物園の動物のストレスが理解できたような気がする。

車は平原を気持ち良く走った。我々も高度に慣れ、また高度自体が下がってくるため体調も良くなっていく。外の景色を凝視し、わずしか見えていないゾンの姿を探し求めるが成果の方は芳しくはなかった。

次のキャンプ地ブンプの夕食は、その朝マで仕入れた羊の焼き肉となった。久しぶりの肉と大切に運んだ最後のウイスキーで日本



放牧されたヤク ブンプの近くにて

人は大喜びだったが、チベット人は宗教上の理由から死んでから三日たたないと肉は口にはしないという。宗教心の無い連中と思われたいらしい。残りの肉は三日後の夕食にゴツタ煮風スープになって胃に収まった。

ブンプからは東進が始まる。チーリン湖をはじめ地球儀でさえも良くわかる大きな湖の点在するコースである。チーリン湖周辺は巨大な湿地帯であり今回のコースの中で一番問題視されていた。しかし天候にも味方され固まった粘土質の道路を走り抜ける。

道路は土盛りされ一段高くなっていくが、道路の凸凹がぬかるみになった時の様子を容易に想像させる。道路を外れたあちらこちらには車を脱出させた跡がまざまざと残されている。

西藏公路まで半日行程の草原で休養をとるため二泊のキャンプを張った。遙か彼方から遊牧民が見物にやってくる。どんな情報網を持っているのか、驚きに値する。

遊牧民は羊やヤクを正しい方向へ向けるために毛で編んだ石投げ網を持っている。これはお土産にいいぞというので、手に入れる算段が始まった。ところが私達が持っている外国人用の金「兌換券」ではだめだと言う。チベット隊員の人民券と交換して手に入れる者

もう必要のない長靴や予備のヘッドランプなどで物々交換を始める者と様々。私も物々交換で何本かの石投げ網とヤクの角で作られた嗅ぎたばこ入れを手に入れることができた。

晴れ渡った平原を半日走ると西藏公路に合流した。簡易舗装され車の往来も頻繁な公路を北部チベットの要所ナクチェの街へ向けて一路南下する。

今日はホテル泊まりとのこと、一ヶ月ぶりの風呂にありつけるはず!

ナクチェの町は商店も立ち並び、ホテルもりっぱな建物だが、給水設備が故障して風呂には入れないという。しかし、もう一つの期待「冷えていないビール」は酔うまで楽しむことができた。

日程調整と宿泊費の節約のためのキャンプをニンチェンタンラ山群を望む草原で楽しみ、六月一日、ドラや太鼓、爆竹の歓迎の中を夏の気配さえ見せ始めたラサへ到着した。

不毛の大地から戻って来た私の目には「太陽の都」とか「日光城」と呼ばれるラサの街全体が発光前とは比べようもないほどに輝きを放ち、魅力に溢れた街として映った。

心躍るような旅の思い出と、新たな夢を探してみようかという気持ちを芽ばえさせて、楽しくも厳しい旅にも終わりが近づいてきた。

チベット閑話

★ヤクは野生のヤクを幾世代にもわたって飼慣らしてきたもの。だんだん体が小さくなっていく。時々野生に近いヤクと交配させているとのこと、北のヤクはやはり野生に近いということなのか。南のヤクより大きく迫力も充分である。

★公路を走るトラック隊はチベットの生活を支える輸送隊である。何十台ものトラック部隊に圧倒される。因みに五十鈴(イズズ)製がやけに目についた。

(大町山の会・山岳博物館友の会々員)

山と博物館第36巻第3号

発行所 長野県大町市 TEL0267-211
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
大町山岳博物館
定価 年額 一、二〇〇円(送料共) 切手不可
郵便振替口座番号(長野四一三三一九三)